



Title	受講生のコメント
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81427
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

CO デザインセンター：コミュニケーションデザイン科目リテラシーE(SDGs：
地球市民の健康管理 I)[外国語学部学部共通科目方法論科目：文化史 C]

今期の授業ははじめ数回は課題，途中から Zoom によるゲストを招いての懇談会の併用で，はじめは課題になれず，課題にかかる時間がかなりかかっていましたが，時間がたつにつれて要領を得て取り組めるようになりました。

この授業を通して，基本的な予防接種のこと，各国の予防接種状況，専攻言語でのあらゆる病気の言い方等，普段なら目を向けないジャンルに触れることができ良い機会になりました。専攻言語でのあらゆる病気の言い方は一つ一つ覚えているわけではないですが，この授業を通して作成して来た課題資料を見ればいつでもわかる，そんな資料が作成できたので，いざというときに生かせれば，と思います。母子手帳や予防接種についての知識は将来自分が子供を妊娠したときや子供を産んでから育てるときまでも生かせると思いました。

また，課題では医療が全般でしたが，Zoom 授業では結核等医療分野についてのことのみでなく，現代における外国人問題や海外事業，価値観の共有やアイデアの創造の仕方，などこれからの様々な困難を生きていくときに柔軟な対応ができるような知識をたくさん学ぶことができました。また，ただただ知識を学ぶだけでなくゲストでいらっしゃった方たちの実際の経験談やお仕事の話を実際に自分の耳で聞くことができ，より現実的にとらえ，より深く身についたように感じました。

特に外国語学部の私たちにとって重要な言語形成や，外国人援助，通訳機器や地域支援，国際化における英語や医療の現場における通訳，多文化共生のための知識や知的創生，NGO についてなど，これからまだ 2 年半外国語学部で過ごす私たちにとってかなり重要な知識を学ぶことができたと思いました。

これらを通して将来の視野を確実に広げることができたと思います。海外，特に自分の専攻地域は発展途上国であり，ボランティアでなく普通の留学や旅行でもこの授業で身につけた感染症や予防接種，結核等の知識を生かすことができました。

さらに SDGs についてはなんだか耳にしたことはあるようなものでしかなく，SDGs とは何なのかを学習することによって小さいながらも一人一人の意識としては変えられることができ，ほんの少しでも SDGs の達成への貢献につながると思います。また自分たちだけでなくこれを広めていくことができればさらに良い社会になっていくことが可能ではないかと思いました。

たった 15 回の授業で、さらにコロナ禍で対面授業ができませんでしたが、かなり有意義な講義を受け、将来に生かせる様々な知識を学ぶことができました。この講義でかなり詳しく学習していたため、他の講義で予防接種や感染症についてのテーマが出てきた際、慣れたもののようにすんなり理解することに繋がりました。また、言語の形成段階についてほかの授業で学んでいたため、この講義を受けるときにその例として受け入れられたものもあり、この講義は想像していた、医療や SDGs に関する知識を得るという狭い範囲の講義ではなく、様々なことに関連した幅広い知識を学ぶことができる講義だと感じました。

また、各回 Zoom のまとめを次週の提出課題でまとめることでよりゲストの方たちの話を理解することにも役立ちました。最後の「適正テスト」では、オンラインでの受検となり、かなり不便でしたが、受検するという経験ができて良かったです。

(外国語学部・ビルマ語専攻)

前期のオンライン授業を通して、初めは Zoom での授業に慣れず、しんどいと思ったこともありましたが、徐々に慣れることができたので良かったです。この「文化史」の授業では、外国語学部の他の授業ではあまり学べないような医療のことについても多く学ぶことができ、自分の知識が広がったと思います。ワクチンのことや、感染症のことは、おそらくこの授業をとっていなければ、これからもあまり知らないままだったのではないかと思いますので履修して良かったです。

この授業の最初の方はポルトガル語の資料を読みながら、感染症やワクチンのことを勉強して、日本では結核などの感染症にはどのような対策がなされているか、治療がされているかを初めて知ることができました。ブラジルでの対策やワクチンと日本での対策やワクチンの種類を比較して、違いを発見することもできたり、面白い課題でした。

また、自分の専攻言語ではその感染症の名前をどのような単語になるのかを知ることができました。この授業がなければ、自分その単語を調べて知ることなどなかったと思うので、良い機会でした。自分の専攻言語でも、あのポルトガル語のような資料や教科書があれば良いなと思いました。

また、この授業ではたくさんのゲストの方にも参加していただいて、興味深く、これから役立ちそうなお話を聞くことができたので楽しかったです。

私が一番印象に残っているのは、矢島裕章さん、田中志緒理さん、印南敬介さんに話していただいた授業です。

皆さん学生のころに留学を経験されてから、職業に就かれた方で自分にとってすごく興

味のあるお話を聞くことができました。海外では、自分の想像以上の経験をされてきた方もいて本当に驚きました。皆さんに共通していたのが、自分のしたいことを、思う存分にしてから、現在の職業も楽しそうにしているということで、やはり自分の興味のあることを突き詰めていくことが、本当に大事だということを改めて感じることができました。留学することは、とても良い経験を得られることがわかったので、自分もコロナが落ち着いて留学できるようにになったら、是非したいです。

話をしてくださった人の中には、様々な職業に就いてから今の職業に就いている方やパラレルワークをしてきた方もいらして、同じ職業をずっと続けることが良いと勝手に思っていました。そのようにいろいろな職業を経験するのも自分のためにはとても良いことなのだと思います。自分にはなかった考え方をしている方もいて、いろいろな意見を聞けて良かったです。

医療通訳については、最近ではAIを活用していますが、それでも感情の面ではなかなか通じないことも多くあり、誤訳をしてしまうことも多くあることを知りました。今後AIが発達していけば、外国語を話せる人がいなくてもコミュニケーションをとれてしまうのではないかと、通訳など必要ではなくなるのではないかと考えていましたが、やはりAIだけではカバーし切れない部分もあることが分かりました。

感染症は、この文化史の授業では結核について、多くの知識を得ることができたと思います。あいりん地域での結核対策に携わっておられる方のお話は、大阪で行われていることで自分たちにとっても身近な場所なのに、初めて知ることばかりでした。結核患者が多く、生活保護世帯が多い地域での結核対策はとても大変で、色々な取り組みがなされていることを知りました。検診車を導入し、DOTS という服薬支援なども活用しながら、対策を講じて、とても大変だということを知りました。

結核自体がどのような病気であるのかも知り、今までは名前しか知らなかった病気なのに、どのように国からの支援を受けられるのか、どのような治療をするのか、どのような症状があるのかを知ることができたので知識が深まりました。

最後の「適正テスト」では、英語・日本語の両方のリスニングをしましたが、英語の方は問題を解くのが難しかったです。日本語のリスニングは、日本語であのような長い文章を聞いて、問題を解くことがなかったので新鮮でした。

この授業全体を通して、たくさんの知識を増やすことができて良かったです。少人数での授業だったので自分のしたい質問をすることができたので、充実した授業時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

(外国語学部ビルマ語専攻)

はじめに、私がこの授業をとった理由は今の社会の情勢を見たとき、コロナという前代未聞の騒動にいかに対応していくべきか、いかに生き抜くべきか、ということのをこれまでの人類史の病への対応を知ることで、自分なりの答えを見つけられると考えたからでした。

前半ではオンライン上で提示していただいた資料を用いながら、あるいはそれに関する事柄を自分で調べ、まとめるという授業形式で時間はかかったものの自分の知識がとても広がったように思います。

私はポルトガル語専攻ではありませんが、授業で用いたポルトガル語の教材においては文法の解説と丁寧な日本語訳付きで、非常にわかりやすく、主に予防接種という観点からですが、現在に至っても警戒されるべき病気や感染症について学べたように思いました。自分もかつて受けた予防接種はあれだけの種類の病気を予防するためのものであったのだな、と初めて知り、とても驚きました。

また、外国語学部として自身の専攻語の文化圏では扱った病気や予防接種がどのようになっているのかを調べることで、私の場合はトルコにおける医療事情の理解も深まったように思います。日本とトルコの予防接種の状況を比較した場合大きな差はみられなかったことは2か国の医療に対する姿勢に大きな差がないのだろうか、ということ推測することができました。

授業の後半では Zoom を用いて招いていただいたゲストの方の話を聞くという機会を設けていただきました。私は実家で生活しており、自分の部屋もないためにカメラで自分の顔を写しながら授業を受けられる日と受けられない日がありましたが、貴重なお話を聞く機会を得ることができたことはとてもいい経験になったと考えております。

私はこれから社会に出ていく身として現場で実際に社会のために働いている方の話を聞いて、自分が将来的に何をしたいかという指標が少しではあったが見つかったように思いました。

私の親はどちらも公務員で自身も漠然と公務員になるのだろうか、と思っていましたが、よりよい社会を作っていくために話し合う職業、施設を運営し社会を支える職業、様々な企業と協力しながら新たな技術を開発していく職業、といったように私の知らなかった職業にたくさん出会うことができました。いずれも魅力的で興味をそそられました。これから何をしたいかということをじっくり考えるきっかけになったと思います。

この授業を通して日本のみならず世界各国の医療事情、将来の展望など多岐にわたって自身の知識・興味を増やせたと思います。この経験を活かして2回生の後半のみならず、大

阪大学での生活，社会に出てからの生活を過ごしていきたいと思いました。本当にありがとうございました。

(外国語学部トルコ語専攻)

この「文化史」の授業では，普段の専攻の授業ではあまり学ばないようなことを多く学ぶことが出来ました。

最初のころにアメリカが国民皆保険*を導入しないことで国民が被る不利益について調べて考察した時には，国民皆保険という制度やアメリカの問題について自分の知らない部分が見えてきて，とても勉強になりました。また，スペイン風邪についても，聞いたことはあったけれど詳しくは知らなかったため，今回調べたことで新型コロナウイルス感染症と共通する点や世界は昔から感染症と戦ってきたことを知ることができたり，これからも起こりうる感染症に向けて，過去の事例から対応策に生かしていくことが大切だということを感じることができたりと，たくさん学ぶことができました。

また，ワクチン接種表を調べた際は，種類や推奨されている時期が様々で，細かく定められていることを初めて知ることができたし，時期や回数をしっかり守り，正しく予防することの大切さを学びました。そして，専攻語での各病名を調べた際には，公益財団法人茨城県国際交流協会編『[タイ語 メディカルハンドブック](#)』（2019 年）というものを見つけ，この資料の冒頭には「日本のお医者さんへ 私は日本の医学用語がわかりません。この冊子を使って私の症状をお話いたします。どうぞよろしくお願いします」とあり，タイ人の人々が日本で適切な治療を受ける手助けになる良い取り組みであると感じました。

また，長期滞在する人なら，双方向運用能力を身につけ，この冊子がなくても問題がないくらいに自身が診察を受けられたり，ほかのタイ人の診察の際に通訳をできるようになったりすればいいなと思いました。いろいろな感染症について学びましたが，これまで聞いたことはあってもどういうものか分かっていなかった感染症について，授業資料を読んだり調べたりして，症状や対応策について詳しく知ることができて，感染症について考えるいい機会となりました。今は新型コロナウイルス感染症が流行しているため，ほかの感染症について大きく報道されることがあまりないけれど，まだ罹患する人もいる感染症で，これからも予防や治療が必要であるから，新型コロナウイルス感染症によって人々の感染症に対する関心が高まっている今こそ，新型コロナウイルス感染症以外の感染症についても発信していき，感染症全体について今後どう向き合っていくべきかを考えていく必要があると感じました。

Zoom を使った様々な方による講義では、農地開拓のためにパラグアイへ移住された経験のある方、機械通訳に携わる方、在学中海外で様々な経験をされた卒業生の先輩方、国際協力 NGO の方など、幅広いジャンルで経験を積み活躍されている方々のお話を聞くことが出来、新たな発見があったりアドバイスを頂けたりして、視野が広がり良い経験になりました。その中でも、特に印象に残ったお話の1つは、井戸武實氏による「愛隣地区における健康支援」のお話です。あいりん地区のことは少し聞いたことがあったけれど、貧困だけでなく、貧困であることによって栄養が十分にとれなかったり体力が低下することで免疫力が低下し、その結果病気にかかるというように負の連鎖が起こってしまうことを初めて知りました。それと同時に、訪問型 DOTS や CR 検診車などの取り組みによって結核の発見率が下がったりと健康支援の成果も少しずつ出てきていることも知ることができました。しかし、依然として課題は残っていることも知り、健康支援は改良を続けながら長いスパンで継続していくことが必要なのだと感じました。また、溝尾氏のポケットクのお話、藤野氏の医療通訳のお話なども印象に残りました。機械通訳は進歩してきているし、通訳者がいない時にはとても便利だけれど、伝える側が気を付けたり、文例を増やしたりしてもどうしても誤訳の問題が残ってしまうと感じたし、正しく訳され正しく伝わっているのか分からないというのはとても不安な点であると感じました。医療通訳は、ただ通訳するというだけではなく、不安を抱えている患者を相手にする通訳であり、感情や文脈を正しくくみ取ることができるのが大切ということを授業を通して学んだことから、やはりそういう点を理解することのできる人間の通訳者も必要であると思いました。そこで、高い双方向運用能力を持つ人材の育成は重要になると考えました。

最後に、安楽死についてのニュースと森鷗外「高瀬舟」の資料について、考えたことを述べたいと思います。高校時代に「高瀬舟」を読んだときは、兄のしたことは正しいのかは分からないけれど悪いことであるとは言い切れないのではないかと考えていたし、安楽死については、生きる権利があるなら、死ぬ権利もあっていいはずでは、と思っていました。しかし、安楽死について調べてみて感じたことは、もし国が積極的な安楽死を認めるとなると、本人が本当は死を望んでいないのに死なせてしまうようなことが起こってしまうかもしれないということです。そのように死んでしまったら取り返しがつかなくなってしまうから、国が積極的な安楽死を認めることはできないのだらうと思いました。そう考えると、「高瀬舟」の弟も自分を殺すように頼んだけれど、それは兄にこれ以上迷惑をかけたくないからで、本当に死にたいと思っていたのか、という考えも生まれてきました。そのため、安楽死の問題は簡単には結論が出せない難しいものだけれど、私たちはまず、生きること、死ぬことについての自分の本当の意思をしっかりと表示することが大切だと思いました。

*国民皆保険の学習については、オブザーバー参加者岡本栄理著「縁(えにし)が紡ぎ出す共創空間～リアルな共創からオンラインの共創へ～」(p.128-130)の中で、言及される、ワンフェス・ユース共同「[ビッグツリープロジェクト Mission 1 きっかけの種をまけ～開催レポート～](#)」(2018年3月29日):の本体ワン・ワールドフェスティバル for Youth(2016～)の2017年度高校生助成プログラム優秀賞獲得「渋谷高校地球防衛隊」のイベントで取り上げた林田発言「[そうだ、もう一度保健体育の教科書から、SDGsを考えてみよう!](#)」の起点が国民皆保険であり、その資料を基に授業展開を図った。

なお、今年度完全オンライン化実現を図った[ワンワールドフェスティバル for Youth](#)(2020)については演者の一人関西 NGO 協議会所属、イベント主幹・佐野光平著「国際協力・SDGs 普及啓発事業『ワン・ワールド・フェスティバル for Youth』のこれまでとこれから」p.81-109.の中で、詳述されている。

オンライン授業の感想

春夏学期の全授業がオンラインになると聞いたときはしっかりと勉強できるのかという疑問やネット環境に左右される授業に不安を抱いていましたが、なんとか無事に終えられたことに安心しています。この授業では前半は毎週のレポート課題、後半は各分野の専門家を招いての講義およびレポート課題という構成でした。

前半のレポート課題は分量も多かったので大きな負担になっていましたが、短期間でこのような分量のレポートを書くことは対面授業ではないことだと思うので、いい経験ができたとも思っています。普段はワクチンや病気について自分で調べ、情報を整理し、文字に起こすことはなかったのでさまざまな情報ソースからこれらのテーマについて学ぶことができました。

レポート課題で興味深かったのは、「スペイン風邪と COVID-19 の比較」というテーマです。約 100 年前に流行したスペイン風邪と COVID-19 への対策に類似点が見られたことが面白かったです。日本でスペイン風邪が終息したのは流行から 2 年が経過したころでしたが、COVID-19 の終息もおよそ 2 年にかかるのだろうか。その場合、自粛生活も同様に 2 年間行う必要があるのか。スペイン風邪と COVID-19 についてのレポート・テーマはこれからの社会や生活を深く考えるきっかけとなるものでした。

後半は、Zoom を利用しての講義形式の授業でした。講義をして下さる方々は、私とは違う半生を過ごしており、考え方も個性があって聞いていて楽しかったです。いろいろなお話をこの授業で聞きましたが、その中で驚いたお話があります。

それは井戸武實さんが話された、あいりん地域で結核患者が多いという事実です。このことに驚いたのは、「結核」という病気が身近ではなく、普段ではあまり気にかけない病気であるのに、私の生活圏内に大勢の結核患者が暮らしていると知ったからです。現在、COVID-19 の流行で「感染予防」という言葉を町のあちこちで耳にします。マスク着用での外出や施設利用は当たり前で、それをしなければ非難の対象になります。これが新しい日常になっている中、同じ感染症である結核予防のために意識して何かをしている人はほとんどいないと思います。しかし、ほとんどの人が結核予防をしていないのに、日本は世界的に見れば中蔓延国という位置にいます。世界から中蔓延国とみなされているのに、日本の国民にはその自覚がありません、この事実は問題だと思います。

このようにオンライン授業という普段と異なる形での授業は、対面授業とはまた違った学び方を示してくれたように思います。対面授業で先生からの情報を一方的に享受するのではなく、レポート課題を通じて自分で調べ、まとめることができました。また、Zoom を使ったリアルタイムでの講義は、対面授業時よりも発言しやすかったです。また、パワーポイントや資料が大きくパソコンに映し出されるので、とても見やすかったです。教室のスクリーンに映し出されるものは見えにくいと思うことがあったので、これはオンライン授業の利点の一つだと思います。

パソコンの画面を見続けることでの眼精疲労や視力の著しい低下、ネット環境に依存する授業といった不安な面や問題点はいくつか上がられますが、COVID-19 の感染リスクは大きく下げられたと思われ、さらに通学時間を気にする必要がなくなったという利点も大きいので、オンライン授業はよかったと思います。

(外国語学部アラビア語専攻)

オンライン授業全体に対する感想・コメントについて

前年度と同様、今学期も林田先生の授業を受講させていただきました。今学期は、前年と違ってオンライン授業でしたが、非常に有意義な授業でした。個人的に、この授業が自分の為になったのには、主に2つの理由があります。

1つ目の理由は、この「文化史(C)」の授業を通して、医療関連の知識が増えたというこ

とです。自分は、今まで医療関連の話題に触れる機会や関心があまりありませんでした。高校では保健体育で詳しく教わらなかったし、大学に入ってから、専攻のディスカッションの授業などで医療をテーマに議論するという機会はそこまでありません。しかし、この授業での毎週の課題を通して、医療に関連する単語（破傷風、スペイン風邪、結核…）について自分で調べてまとめる作業を行ったことで、自分の中の医療の知識が増えた、と個人的には感じています。それに加えて、自分の専攻する言語（を話す国）とその医療単語に関連づける作業も行ったことで、自分の専攻語を話す国での医療事情にも少し詳しく慣れたと思います。

2つ目の理由は、Zoom 授業を通して、ゲストスピーカーの方々から、医療を中心に幅広い話題についてのお話を聞くという貴重な体験ができたことです。特に、機械通訳のお話や、医療通訳に関するお話は、言語を学ぶ外国語学部生としてとても印象に残っています。医療現場における国際化＝英語ではないからこそ、多言語でのサポートが必要不可欠であり、医療通訳では、相手の文化的背景などに寄り添って適切な表現を選びとる Contextual Sensitivity（文脈を汲み取る感受性）を心がけなくてはならないということを学びました。また、大阪大学の先輩方からは、学生時代や現在の仕事などについてお話を聞き、意欲的・精力的に物事に取り組むことの大切さや、語学というものについて再認識することができました。他にも、異国の地に少年移民として渡ったという実体験や NGO の活動についてなど、様々なお話を聞くことができました。

また、Zoom 授業は、ゲストスピーカーの方のお話を聞いた後に、1人1回必ず質問するという形式を取っていたことで、色んなテーマに関心を持ち、自分なりの疑問点を持てるようにその話題について深く考える、ということの大切さも学ぶことができました。

今回「文化史◎」のオンライン授業では、毎回の課題を通して自分の中の医療の知識が増え、またゲストスピーカーの方々のお話を通して、幅広い分野のテーマに触れることができ、自分にとって意義深い授業となりました。大変お世話になりました。

（外国語学部英語専攻）

今回のようなコロナ・パンデミックが起こるとは今まで一度も予想したことがなく、漫画や映画で描かれていたような感染病が蔓延する事態が初めは現実的に考えられませんでした。

しかし、ドイツ留学のために消滅し、復学とともに当然得られるはずだった日本での学生ビザがコロナウイルスによる日本政府の政策とともに取れなくなり、韓国で滞在せざるを

得なくなってから私も徐々に実感が湧いてきました*。韓国では比較的コロナウイルスの抑え込みが成功的だったため、必ず家に閉じこもっていなければならないといった状況ではなかったものの、今までの人生で当たり前だった日常生活が変わっていく事になれなかったです。特に、義務教育を受ける際も、大学での3年間でも私の人生で授業というものや何かを学ぶということは必ずといっていいほど対面形式だったのに違う国で言葉通り遠隔形式で大学の講義を受けなければならなくなった事が、私に襲い掛かったコロナ・パンデミックに伴う変化の中で一番身近に感じられるものでした。

若者世代は既存の世代よりも遠隔的な媒体、オンライン形式において比較的に慣れているとはいえ、私はそんなに機械操作に詳しくもなかったですし、友達との連絡などの私的な用事でなければオンラインで何かをしたことはありません。そのため公的な事と言える大学や就職活動などをオンライン形式でしなければならない事は非常に不安で、戸惑いを覚えました。もちろん、私が日本に戻ることができないという現状を踏まえると、今学期の大学講義全般が遠隔方式でなされると知らされたとき、まず安心をしました。公式的な事をオンラインでしなければならないと不安な気持ちもありながらも、普段よく使用しているスマートフォンやノートパソコンで行えば良いのだから、と安易に考えていた部分もあります。

しかし、私のそんな予想とは違い、不安に思っていた部分が現実になりました。対面形式で講義を行っていた時は実際に起床して外出する準備をし、大学まで交通機関を利用して移動するなど、体を動かしながら自然に講義を受ける状態になっていたように思います。建物や場所を移動し、人と直接接するなどして、今いる場所や起きていることが現実だという認識がはっきりしていました。しかし、コロナ・パンデミックによって全てをメールやインターネットサイト、Zoomなどの仮想の空間でやり取りしなければならない状況になるとどんどん現実感がなくなり、媒体や授業ごとの認識が以前に比べて薄れてきた事によってそれぞれの違いもあまり分からなくなりました。エラーなどが現れた時の対処に困り、既存のやり方とあまりにも違う点が多くなるほど予想よりもはるかに混乱し、ストレスも積もっていったように思います。

今回のコロナ・パンデミックのような状況に置かれ、今までのグローバリズムの虚点の問題視され、世界での直接的な交流のあり方を再度考え直す必要性が出てきました。特殊な例といえるかもしれませんが、感染症の場合は特に直接人と会う、話すといった対面的な交流、接触が一番危険だと言わざるをえません。そのような観点から考えると、物理的な一定距離を保つことができるオンラインという形式は魅力的かもしれません。また、国際交流の観点からしても、常時よりも国家間の協力が必要な今のような時に、より簡単で容易にコミュニ

ケーションを取ることのできるオンライン形式は現代社会においてなくてはならないものになったと思います。

しかし、以前からオンラインブックと紙媒体の本のどちらが良いのかといった問題がよく議論されているように、既存の使い慣れた現実味のある方式とはかけ離れた仮想空間を利用する事が難しいことがよくあります。特に、高齢者の方などは比較的遠隔媒体を使用する事がより困難だと思います。コロナウイルスもそうですが、免疫力が低く、病気を耐える体力が足りない老人にとって感染症は致命傷のはずです。一番弱者でありサポートを必要とする高齢者が、弱者にならざるをえない今回のような状況でも慣れないオンラインという形式によって取り残されるといった事態になる事はないだろうか、と考えさせられました。どの時代でも有事の際、弱者はより弱者になるという点が哀しいです。

オンラインで講義を受けながら慣れなくストレスフルな1学期を過ごしましたが、そのような経験と文化史の授業の中で学んだ感染症への若干の知識を得たことで、私たちの生きる現代社会のあり方、弱者への配慮、有事の際、国家はどうあるべきなのかなど、様々な点について考える機会になりました。

私の人生でコロナ・パンデミックを若いうちに経験したことによって、ポストコロナや今後の私の生き方についても影響を及ぼしたと思います。慣れた場所で同じようなことをしながらも、このように一つ違った形式になったことで全てがガラッと変わる点を感じ、人生においても少し観点を変えただけで全てが違って見えるかも知れません。

今回のコロナ・パンデミックや日常生活で必ずオンラインを使用するといった体験を通して何かを学ぶように、これからも色んな事から違った観点を得るような習慣をつけたいです。

(外国語学部ドイツ語専攻)

*なお、この学生はコロナ禍、韓国から日本入国のビザ取得に手間取る中で、卒業年4年であることから、日本での就職活動を諦め、韓国で無事就職している。(林田追記)

CO デザインセンター：同科目：リテラシーA(SDG s：多文化サポート概論

I)[[外国語学部学部共通科目方法論科目：言語学概論 B]

1. 適正テストの感想

今までに受けたことのないタイプのテストで、戸惑ったが、面白くもあった。最初の英語の文章のリスニングが終わり、選択肢が提示されたときには、「選択肢はあるけど、問題が提示されていないから何を答えればいいのかかわからない」と一瞬困惑した。しかし、よく見てみると、リスニングのときに聞いた覚えのある単語や表現が並んでいて、納得したと同時に、これは私が知っている、答えを求められる「普通の」英語のテストではないのだと実感できた。特に、英語から日本語、あるいは日本語から英語への翻訳文の穴埋めをする際には、文脈を見ず単語だけで判断しては答えられない問題も多く、文脈を踏まえることの重要性を感じ、また、通訳の疑似体験とまではいかななくても、通訳のイメージが少し、より明確になったように感じた。

このテストでは、困難に感じることも多かった。オンラインでの実施のため仕方がない部分もあると思うが、慣れないテスト内容に加え、オンライン受検によるストレスもあり、少し苦しい体験となった。まず、1文字の綴りの違いも見落としてはいけないような選択肢を確認するために画面に顔を近づけて正確に読み取らねばならず、それを90分続けたため終盤には目の疲労が大きくなっていた。また、1つのパソコンの画面上にZoomに表示されている問題文・選択肢、下書き用紙、解答用紙の3つ全てを表示させながら、必要な部分をすべて確認できるようにするのは簡単なことではなかった。下書き用紙を別のパソコンで用意し、パソコンを2台使って受検するなど、何らかの対策を取れば良かった、と反省点となった。一番大きかった困難は、問題文と選択肢を同時に確認できないこと、自分のペースで問題を解き進めることができないことだった。画面に表示させることができる範囲には限界があり、また受講生それぞれで解くスピードが異なるため、それぞれ見たい部分も異なってくる。そんな中、全員が自分の希望を言うことはできないので、周りの受講生を振り回さないために、戻してほしい、あるいは先に進めてほしいと思っても口には出さずただ待っていることが多かった。問題文と同時に表示することができない(一部は問題文と同ページだが、その他、別ページのため同時に表示できないなど) 選択肢の場合、問題文を暗記しないと答えられないことになるが、問題を見てから、後半の選択肢にたどり着くまでにはタイムラグがあり、そこまで記憶は持たず、選択肢のみを見て問題を推測して答えなければい

けないことも多くあり、これで正確に自分の双方向運用能力が測れているのかどうか疑問に思った。

全体としては、ストレスに感じることも多かったが、初めてこのような形式のテストを受けてみて、貴重な経験となった。直訳するだけではなく、文脈を踏まえて理解し、訳せるようになりたいと思った。

2. オンライン授業全体に関する感想

後半は、毎週さまざまなゲストスピーカーの方から貴重なお話を聞くことができ、良い機会となった。結核のことや機械翻訳機器のこと、医療通訳のことなど、自分から積極的に調べないようなことも知ることができ、この授業を通して少しでも視野を広げることができたのでは、と感じている。特に、7月7日の授業でお話いただいた田中志緒理さんや、7月14日の授業でお話いただいた佐野光平さんのお話が印象に残り、自分が想像もつかないような世界のことを教えていただけてとても楽しいと感じられたし、もっとお話を聞きたい、そして自分から行動できるようになりたい、と強く思った。

また、普段私は人間科学部の授業を受けているが、普段とは違ったクラスメート、雰囲気の中で授業を受けるのも新しい体験だった。ゲストスピーカーの方に質問するときも、外国語学部で学んでいる受講生が多いからか、言語に関する質問を投げかける受講生も少なくなく、人間科学部の学生との関心の違いが印象的だった。授業で毎回ゲストスピーカーが登場するというのはなかなかないことだと思うが、普段と違うクラスメート・雰囲気の中で授業を受けられる、毎週新しいゲストスピーカーの方のお話を聞くことができる、ということと新鮮な気持ちで授業を受けることができていると感じている。通常通りの対面授業の場合、私は主に吹田キャンパスで授業を履修しているため、箕面キャンパスで開講される授業を受けることには難しい部分があるが、今回はオンライン授業という形で受けることができ、良かったと思う。

(人間科学部共生学)

1. オンライン授業全体の感想

私はオンライン授業には概ね賛成である。今学期、Zoomでのオンライン授業が週11コマあり、そのほかにも、レポート提出型のオンライン授業や音声とwordファイルで行う授業などもあった。Zoomでのオンライン授業に関しては、どうなるのだろうというワクワクした気持ちとビデオ越しに友達や先生の映像を見るのが新鮮だったのもあり、オンライン

授業がとても楽しかった。また、Zoom を使うのも初めてであったので、とても目新しかった。そのため、週に Zoom を用いた授業がたくさんあっても最後まで授業に集中して受けることができた。さらに、オンラインならではの良さもあり、今までは先生が口頭で説明していたことも画面を共有することで図や写真ですぐに示すことができ、私たち学生も以前よりも容易に理解できるようになった部分も多いのではないと思う。その他にも、Zoom であればいつでもどこでもネット環境が整っているところでは授業を受けることができるので、寝起き 5 分、10 分のパジャマ姿でも受けることができた。そのため、普段は 2 時間弱かかる通学時間を短縮することができ、その時間を授業の予習や復習に使うことができたり、睡眠時間の確保をすることもできたのは Zoom ならではの良さであると思う。その反面、やはり先生と直接会うことができないので、距離が遠く、気軽に質問できないことなどの不便な点もあったと思う。また、特に言語の授業に関しては音声の問題などもあり、きちんとした発音ができているのかわからない部分も多く、言語で重要な発音の部分にあまり力を入れられなかったことが難点ではあったと思う。

さらに、Zoom 授業だと学期の後半になると、学生の集中力が切れ、ビデオをオフにしていることが多かったように感じる。そうすると、ますますビデオをオフにすることで、スマホを触ってしまったり、他の課題をしていたり、自分に関係ないところはほとんど聞いていないという状況の時もあったので、対面の授業よりも内容を理解できていないことも多かった。また、先生の問いかけに対して学生の反応がわかりづらいので、先生としても授業を進めづらかったりしたのではないと思う。その点などはオンライン授業の難点ではないかと思う。

Zoom 以外の授業に関しては、基本的に文献を読んでレポートを書くという形式のものがほとんどだった。私は計画通りに進めることができずに、課題を溜めてしまい、期日の前日や当日に焦って進めるということが多かった。そのため、文献を急いで読み、あまり頭に入っていない段階でレポートを書くことが多く、あまり自分の身にならなかった部分が多かった。また、毎回先生の話を見聞かずに、レポート課題のみであると、何の目的でそのレポートを書いているのか、授業の意図がわからないこともあった。そのため、やはり先生と対面で授業を受けた方が、内容もより伝わってくるのではないかと感じ、もし、後期もオンラインの授業が続くのであれば、レポートタイプの授業よりも先生の授業を直接聞ける授業の方が受けたいと感じた。また、Zoom であれば、先生が一方向的に話す講義形式ではなく、ディスカッションやプレゼン形式の授業であれば向いていると思うので、学期の数回はそのような形式で行えば、学生も受動的ではなく、能動的に授業を受けられるのではないかと感じた。

また、オンライン授業とは直接は関係ないが、弊害もたくさんあると思う。例えば、知合いの1回生の話を聞いていると、オンライン授業であるために友達がなかなかできない、できてもLINE上だけであり、どんな性格かわからないという人がほとんどであった。また、授業やサークルなどにあまり参加していないために、まだ大学生にはなりきれていない一回生も多くいるのではないかと感じた。そのため、後期はぜひ対面で授業を実施してほしいと思う。

2. 林田先生の授業の感想

オンラインの最大のメリットはネット環境があればどこでも人と繋がることのできる所であると思う。林田先生の授業はその特徴をとて生かしている授業であると感じた。6月以降、Zoomでの授業になってからは毎回色々な立場の人がゲストとして様々なお話をしてくださった。日常生活では絶対に出会うことができない方々ばかりだったので、とても貴重な機会であったと感じる。そのゲストの方の中には、東京の会社で働いている方もいらっしゃって、きっとこの状況下ではなかったら、平日の夕方になかなか大阪まで来ていただくこともできなかったであろうし、これはZoomだからできたことであったと思う。特に印象に残っているのがフューチャーセッションズの芝池玲奈さんであった。政府、行政、企業という三つの団体を結びつける役割の職業が存在することすら知らなかったのも、とても興味深く、自分の視野が広がったと思う。また、その他にも大阪大学を卒業なさって働いていらっしゃる先輩方のお話もたくさん聞くことができ、質問することもできたので、他の授業ではなかなかできない貴重な機会であったと思う。

(外国語学部アラビア語専攻)

このオンライン授業を通して、様々な会社、立場、経歴の人々から貴重なお話をいただくことができてとてもよかった。知らなかったことをたくさん知ることができ、海外に行ったことのない私にとって、とても刺激的な内容ばかりだった。

特に興味深かったのは映像ドキュメンタリストの田中志緒理さんの話である。田中さんがもともと希望していなかったペルシア語が、イランやアフガニスタンなどに行くと興味を持つようになり、ペルシア語の通訳なども務めるようになったことは、外国語学部において希望していなかった専攻語にいる人の希望の種になると思う。田中さんがそうしてペルシア語が好きになれたのは、言語が生きている場所に行ったからではないかなと思った。もちろん机の上でやる言語の勉強も大事だが、言語を学んでいる以上、そういった「生きた」

言語の経験が不可欠だと思った。

私は今年の 4 月になってから毎日オンラインで英会話を続けているが、私は英語を 8 年勉強してきてそこで初めて、自分の生きている世界と英語というものが結びついたのを感じた。フィリピン人、インドネシア人、アメリカ人などに自分の思っていることや今の状況、自分自身についてのことを英語で語ることで、ただの文字でしかなかった単語の 1 つ 1 つが世界と一体化するのを感じた。

だから、私は単語集で単語を覚えるという勉強方法は効果的でないと思う。たしかに、誰もが自分の学んでいる言語が話されている国に行けるわけではない。だが、実際に現地の人とインターネットを通じて話してみたり、興味のある分野の文章を読んだり聴いたりすることで本当に「生きた」言語の経験はできる。私は大学の受験勉強中、英単語集を持ち歩いてボロボロになるまで繰り返し見ていたが、苦労したわりに全然覚えられなかった。覚えたのは、長文読解でよく出てくる単語だけであった。それが覚えられたのは、「生きた」文脈で実際に使われているところを見て何度も経験したからである。また、長文の内容とともに思い出しやすいからである。英単語集だけで覚えようとした単語が覚えられなかったのは、「生きた」文脈がなかったからである。例文がついていても、1 文だけでは何の印象にも残らないし、ストーリー性もない。言葉とは本来そうして身につけるものではないと確信した。

また、言語でのコミュニケーションは単なる記号のやりとりではないため、通訳者は文脈をくみ取り、文化の背景を踏まえて、言葉を言い換えて訳さなければならないことを学んだ。機械が通訳者にとってかわることは今はまずできない。ポケトークという翻訳機器の存在は前から知っていて、これは言語を学んでいる人々の行き場をなくすものになるのではないかと不安だったが、機械では文脈から判断して省略している言葉を補ったり、その国の文化を反映した言い回しを理解して意識したりすることができない。そのようなことが知れてほっとした。人間のコミュニケーションはまだ人間にしかできない部分があるのだなと思った。また、バイリンガルであるだけでは通訳者には不十分であることもわかった。私は今まで、バイリンガルならどちらの言葉の意味もわかるのだから、訳すことなどたやすいだろうと思っていた。しかし、そうではなかった。バイリンガルはどちらかの言葉をしゃべっているとき、その言葉に適応する脳になっている。それをほかの言葉に直せるようになるには訓練が必要である。思い返してみると、私がポルトガル語を学んでいるときも、和訳することを求められたとき、辞書の訳にとらわれてぎこちない日本語になってしまうことが少なくない。そもそも構造的にも異なる言語同士の訳をすることはそう簡単ではない。それぞれの構造、特徴、文化的な背景を十分に理解した上でできることである。ポルトガル語とともに日本語も深く学んで、ポルトガル語を自然な日本語に、また、日本語を自然なポルトガ

ル語になおせるようになりたいと思った。

私は将来社会に出て働く前の、今の大学生活の間に、たくさんを知ってたくさんを経験をして、興味を持ったり心に引っかかったりしたものを仕事に反映できたらいいなと思う。この授業を受けて心に残ったのは関西 NGO 協議会の佐野光平さんの話に出てきた NGO のことである。少年兵、飢餓、貧困などで困っている人々が世界にたくさんいるのに、私はそれに対して何もしないで日本でぬくぬく過ごしていていいのだろうかと思った。テレビを見たり、インターネットで検索したりして大変な状況を知り、同情するのは誰にでもできることだけれど、その気持ちを行動に移すことは誰にでもたやすくできることではない。しかし、外国語を学び、自由に使えるようになったらアクセスできる情報量は大幅に増える。現地の人も話しやすくなる。自分が将来したいことは何か、改めて考えさせられるきっかけになった。

(外国語学部ポルトガル語専攻)

オンライン授業に関して：感想

4・5 月は文章の要約やそれに対する自分の意見などをワード二枚に綴ることが課されていたのに関して、私は 1 年生の頃レポートを書くのに苦手意識があったのでレポートの課される授業は極力避けていたためか、私はそれまでワード二枚のレポートを書いたことがなかった。この授業で毎週ワード二枚のレポートが課されるのだと分かったときは、この授業を最後まで受講できるのか非常に自信がなく、履修を取り消した方がよいかもしれないという考えが頭をよぎったこともあった。しかし私はその度に、シラバスを何度も読み返して、自分がこの授業で学びたいことを心に刻み、絶対に最後まで履修するぞという気持ちを持ち、モチベーションを再び取り戻していた。

6 月からは Zoom による授業が行われ、ゲストによるお話では自分が今までに知らなかったことや、ゲストが大学時代に何をしていたか、そこから今に至る人生の経緯など、非常に興味深い話を毎回伺うことができた。また、特に今はコロナの影響で全く外出しておらず、人と話さない日々が続いていたので、このような場が週に一回あるというだけでも心が楽になり、火曜日を迎えるのが楽しみであった。

この授業が Zoom で行われることに関して、何ら不便さを感じることはなく、以下の理由から、むしろ快適さを感じるほどであった。まず、スライドが何の障害もなく間近で見ることができるということである。従来の対面授業の際、自分の席が二列目以降だとスライド

が他の学生の頭に隠れて見えないことが多いが、オンライン授業だと自分のパソコンの画面全体に大きく表示されるので見やすいうえに自分とパソコンの間で障害となるものは何もないのでストレスなく、スライドに集中することができた。次に登壇者に質問を投げかけやすいということだ。私の場合、どの授業においても初めの方は Zoom の画面に皆の顔が並んでいるのに緊張して、あまり発言することが出来なかったが、後半になってくるとみんなの顔が見慣れてくる上、Zoom を使用するのにも慣れて発言することに緊張しなくなり、気兼ねなく発言することができるようになった。最後に集中できるという点だ。オンライン授業だと教室外での雑音、教室内の授業に関係ない話し声、誰かが鼻をかむ音などの雑音がすべてシャットアウトされるので、授業だけに集中することができた。また、Zoom でカメラをオンにしていると常に他者からの視線があり、自分の画面上での表情や振る舞いがいつ見られているのか分からないので、常に緊張感をもって授業に臨むことができた。

これに対し、「適正テスト」のオンライン上での受検については、かなり不便さを感じた。「適正テスト」のアンケートにも述べたのだが、私としては自分のペースで受検できないということが、オンライン受検の一番の問題であると感じた。

私がこれまでに受講した授業の中で、この授業ほど多くのゲストを呼び、多くの課題が課されるものはなかった。ゲストからは新たな知識やものの見方を知ることができ、課題からは自分の考えや他者の考えを整理して論理的に書くにはどうすれば良いかを探ることが出来た。特に後者に関しては今まで自分が避けてきたことであつたので、この授業で何度も自分の意見を書くという訓練ができたのは非常に有意義なことであつた。結果として、私はこの授業を受講して本当に良かったと思う。

(外国語学部ポルトガル語専攻)

私は、今回オンライン授業で、本授業を受けることができて良かったです。授業を自宅でパソコンで受けるということは、人生で初めての経験で、戸惑うことも多かったです。

私は、本授業を受けて、自分の考えや意見を、自分の言葉で書く力を身に付けたと思います。テーマは、大阪の在留外国人に関することや、日本での医療通訳・翻訳のことや、世界での環境問題など、多岐にわたっていました。規模が小さい問題から大きい問題まで、沢山の種類のテーマを考えたので、自分の考えや知識や世界が広がったと感じています。一筋縄ではいかないような難しい内容のテーマでは、自分の考えを書くために、沢山調べてそれに関する知識を身に付けました。自分が思う以上に、日本には沢山の問題があるということを知りました。

本授業は、私にとって、最も通常授業に近い授業でした。本授業は、画面のミュートを解除して、全員が顔を出すところが良かったです。本授業以外の他の授業は、画面も音声もミュートにし、顔も音声も出さないです。先生は、顔は出してほしいけれど、その強制はしませんと仰っていました。その結果、前期の授業の間は、誰も顔を出さずに終わってしまった授業もあります。先生は、「講義はしたけれど、一方的にこちらだけ顔を出して話すだけだったので、授業をした気にはならない」と仰っていました。だから、本授業は、一番、対面授業に近かったです。沢山のゲストの方々が、貴重なお話をして下さい、本当に私のためになりました。この授業に関しては、先生やゲストの方々に質問もしやすい環境でした。また、1人1人が意見を言う時間を設けて下さったことが、何よりも良かったです。以上のことから、この授業は、実際の対面授業に近い授業でした。

また、本授業では、毎週A4二枚程度の課題が出されました。コロナウイルスが流行って、一日中家で授業を受けるとなると、目の疲れや体の疲労もあり、怠けて家でダラダラしてしまいがちです。その中で、毎週A4二枚の期日が決まったレポートが課されるのは、自分にとって、コロナ禍期間の生活に、良いプレッシャーが与えられて良かったです。期日が決まっているという点が、良かったです。学期末に全ての課題を提出するという授業もありましたが、私にとってそれは難しかったです。

続いて、オンライン授業に関して、私が思う利点は、大学までの移動時間が無くなるので、自分の自由な時間が増えたことだと思います。片道に小一時間、往復で二時間かかります。往復に費やす手間や、時間や、体力を使う必要がなくなったので、それらを他に充てられるようになりました。コロナウイルスが流行る前は、料理を一切したことがなかったです。ですが、この自粛期間で家にいる時間を有効活用し、料理を勉強しました。実践的に、家で模索しながら学ぶことは、やはりこの自粛期間でしかできないことだと思います。

現在、このコロナウイルスの流行をきっかけに、世界はオンライン化が進んでいます。オンライン会議、リモートワークなど。時代は常に進歩していて、私はそれについていくので精一杯です。しかし、このように不自由な環境の中でも、大学生らしく、課題をこなし、授業の復習や予習をする毎日を送ることができて良かったです。後期の授業もこのようにオンライン授業を実施する可能性が高いと言われています。ですが、私は、夏休みも後期授業も、自分の今ある環境で最大限にできることを考えて、自分なりに頑張りたいです。

(外国語学部アラビア語専攻)

この授業では全体としてこれまで知らなかったことを、前半の資料学習、後半の Zoom で

の講演から学ぶことができた。

前半にでてきた[大阪府国際交流財団](#)編「[大阪生活必携](#)」も知らなかったことの一つで、ゴミの出し方や困った時に相談できる場所など、日常生活で必要となることが書かれているものがあるというのは全く知らなかった。さらにこの「大阪生活必携」を始め、授業で取り上げられた資料の多くが、在留外国人を始めとした、日本語学習者のために、カタカナと漢字のすべてにひらがなルビ付きで、不慣れな日本で暮らすすべての人々にとって、非常に協力的な姿勢を感じた。また、同「大阪府国際交流財団(OFIX)」*には、国際交流ができるボランティアのサイトなど、興味があるけれど知らなかった団体や活動などの存在を知ることができて非常に良かった。

この授業を通して新たに知ったことの一つに医療通訳者という存在がある。それまで通訳者と聞くと、両者の会話を円滑に進めるために外国語と日本語を過不足なく翻訳するというものしか思い浮かばなかった。医療通訳者は違った。医療通訳者は患者の生活背景や意思などを考慮したうえで、医者と患者の架け橋の役割を担うもので、ある程度の医療用語や知識などがなければ務まらないし、その通訳によって患者の生活や命に関わってくるといふ重大な役割だ。これからはグローバル化が進み、日本で暮らす外国人など、日本の病院や医療などを利用する外国人は増えていくだろうから、医療通訳者というきっちりとした枠組みのある職業を作る必要があるのではないかと思った。各病院に医療通訳者を常駐させておくのが良いのではないかと考えたが、いつ外国人患者が病院を利用するかは分からないので、今のところはそのような対策は不可能だというお話を聞いて納得した。

後半の講演会は職業も年齢も経験も全く違う様々な人のお話を聞くことができ、非常に刺激的だったが、特に刺激的だったのはアメリカ縦断を中学生の時にした映像ドキュメンタリストの田中志緒理さんとシナノケンシ勤務の矢島裕章さんのお話だった。このお二人は豊富な留学経験があり、留学をするときはある程度「どうにかなるだろう」と心を大きく構えておくこと、現地での文化を受け入れ、取り入れつつも自分の意思を強くもつこと、自分の得意なことを見つけてそれを磨くことが必要なのだろうと感じた。私は昔から自分にあまり自信がなく、新しいものごとをするときにあらかじめ、しっかり練習をして挑まなければ不安で、緊張して何もできないタイプなので、「思いついたら即行動」派のお二人のお話はとても参考になった。また、ナレッジキャピタルについて、良く行く梅田のグランフロントにあるとは知らなかったのも、また何かイベントがあるときはいつてみたい。特に、こたつ会議は様々な職業の人でこたつを囲んで、ある話題についてラフに話すというイベントで、普通の机ではなくこたつを囲んで気軽に話すというアイデアはユーモラスで、面白いと思ったので、今年はコロナの影響で開催は難しいと思うが、来年にでも行ってみたい。

最初にも述べたように、この授業では知らなかった新しいこと、結核についてなど全く知らなかった分野や現場（あいりん地域など）で活躍する方々のお話がたくさん聞くことができたので非常に有意義だった。オンライン授業だからこそいろいろな方の話を一度の授業で聞くことが出来たのも良かった。

（外国語学部ハンガリー語専攻）

*大阪府国際交流財団(OFIX)の現理事長は初の民間人登用で、[タカラベルモント](#)代表取締役兼社長の[吉川秀隆氏](#)(2018 年度～)で、現地法人を有する機縁で、1969 年交流協定締結 1970 年スタート[大阪・サンパウロ姉妹都市協会](#)理事長も務める。[林田](#)は同姉妹都市協会理事職にある：

オンライン授業全体に対する感想・コメント

この授業を取ろうと思った理由としては、日本の多文化共生について学びたいと思ったからです。この授業のシラバスを読み、言語の壁などについて理解や考えを深められそうだと思い、履修しました。授業を受ける前までは、言語の壁といっても具体的なイメージはあまりついていなかったように思います。しかし、現在では、医療現場における例など具体的なイメージを持つことができていますし、その壁に対して現在行われている施策なども知ることができました。これからは、健康面以外においても日本在住の外国人などが直面している壁について考えていきたいと思います。このように、この授業を通して、日本に住む外国人に関する問題をより具体的に考えることができるようになり、どのような側面があるのかについても以前より理解していると思います。そして、外国人に限らず、日本国内での結核などと言った問題や、SDGs に関わる社会課題の解決に向けた取り組みなど、この授業を通して自分の視野が広がったことを実感しています。

以下ではどのように視野が広がったのかについて書いていきたいと思います。

1. 双方向外国語運用能力について

林田先生が、橋渡し役になるには、まずは日本語でその専門用語などを理解しておく必要があると言われていたことが印象に残っています。確かに、日本語で理解できていないことを外国語で説明できるはずがないと納得しました。

実際に「適正テスト」を受けてみて、話題によって英文の聞き取れる度合いや理解できる

度合いが全く違うことを感じました。これは、その内容についての基本知識や英語での語彙力が足りていなかったことが原因だと思います。双方向外国語運用能力という観点からは、私にはその能力があまりないように感じました。日本語から英語に訳す作業では、日本語での内容は理解できますが、英語の語彙や文の流れを正確に作ることができなかったと思います。また、英語から日本語に訳す作業では、先にしたように、英語の内容が理解できたものとできなかったものにわかれまして。英語が理解できたものについては、日本語でも正確に文章を作ることができたと思いますが、英語が理解できなかったものについては、当然、日本語の文章も作るのが難しくなりました。双方向外国語運用能力を身に付けるには、外国語の能力だけでなく、母語の能力も伸ばす必要があると感じました。

2. 結核について

この授業で結核についての話を聞くまで、結核という病気については、名前を聞いたことくらいしかありませんでした。この授業では結核の症状、治療法などについてや、国内では大阪での罹患率が高いこと、日本は先進国の中では高い罹患率であることなどを知りました。罹患率が高い大阪の中でも、特に高くなっているのはあいりん地区であることも知りました。授業を受ける前は、あいりん地区（西成区）はホームレスが多い町ということしか知りませんでしたが、その地区でホームレスが多くなった背景についても知ることができました。日本と外国という観点での多文化共生とは違った視点からの多文化共生に関する問題が表れている部分であると感じました。

3. 医療通訳について

この授業を受けるまで、通訳と言えば、ある言語で言われたことをそのまま別の言語に言い換えることだと考えていました。この授業でも、そうだとされていたと思います。しかし、医療通訳においては、患者の言語的・文化的背景をくみ取り、医者の方の言葉の意味が正確に伝わるように言い換える必要があるということを理解しました。それができるかできないかによって救われる命も失われる命もあるということを感じました。そう考えると、医療現場では、機械通訳機による通訳では不十分であるということも納得ができます。現状、そのような医療通訳者は足りているのか、現場ではどのように通訳が行われているのかなどについてはさらに詳しく知りたいと思いました。

(外国語学部日本語専攻)

オンライン授業全体に関する感想・コメント

大阪大学外国語学部 3 年である自分が 2020 年度前期の授業で経験したオンライン授業の形態は具体的には ① Zoom を利用した生中継双方向会話型授業（ノート PC で）、② 大阪大学授業支援システム CLE や KOAN の掲示板に張られた指示に従い、何らかの課題を提出する（課題そのものが授業）の二つでした。他の大学の人に聞いても大部分は同じようでした。この授業はあるテーマを主軸に、Zoom を用いて主に講演形式でいろんな方の話を聞き、質疑応答かつ議論、というスタイルでした。PPT を利用した講演が多かったのも（それがしやすかったからかもしれませんが）、実際に教室などでスライドを見るよりは見やすかったかもしれません。講演者、発言者の表情もしっかりと見えたので、話に集中できたことが良かったと思います。事前に講演者の情報等を KOAN の掲示板で確認できていたことも良かったです。また、様々な関連情報を林田先生が時折紹介してくださったこともオンラインでなければ起こり得なかった部分で、有難いことだと思いました。

ひとつ困ったことがあるとすれば、最後の授業のテストです。Zoom 画面で先生の端末から共有表示されている問題文を読み、自分の端末のファイルに書き込んでいくという形式のテストでしたが、肝心の問題文が大変見難く、手元に問題文があってテストを受けた場合とは全く違う結果になるだろうと思います。Zoom 画面を開きながら、自分の解答用紙も同時に開いた状態で画面を維持する/切り替える必要があったことに加え、問題文の空欄部分と選択肢の位置がスクロールしなければ見えなくなるほど遠いためにそれらを両方記憶でもしない限りは、頻繁に空欄部分と選択肢を見比べる従来の穴埋め文章問題の解き方は通用せず、今回の問題文/選択肢のみが一定時間交互に表示され続ける提示方法ではかなり苦労しました。素直なところ、このあたりがあまり考慮されていないのは親切ではないと感じました。英文にせよ、和文にせよ、穴埋め問題文を解かせるなら問題文と回答選択肢が同時に見えていないと今の自分には解けません。「写真を撮ってもいいか」「画面を戻してほしい」等の声がテスト中に頻繁に聞かれたことから、この事態は自分のものだけではないと推察しています。横長画面なことを考え、左右に問題文と選択肢解答が同時に収まるような問題文をつくる、あるいはもっと違う方法で、公平で完全に近いものを目指すべきだと思います。

他の先生方や学生も含め、オンライン授業に関しては初めてのことが多いでしょうから、当然お互い試行錯誤となりますが、こと技術的な問題に関してはお互いに問題の指摘・改善が遠慮なくなされるべきだと考えてこのコメントを記します。

さて、もともとキャンパスを所有するはずのこの大学においてオンライン授業が行われ

ているのは言うまでもなく、新型コロナウイルスの感染拡大防止が理由ですが、大阪大学は4月当初こそ「ゴールデンウィークまではオンライン授業とする」と発表し、その先もオンライン授業が続くのかどうかはギリギリのゴールデンウィーク直前になって発表しました。後期がどうなるかも同様に後期授業が始まる直前まで待たねばわからないでしょう。ただ、自分はオンライン授業が継続する覚悟でいます。対面授業ができるようになるかもしれませんが、少なくともいくつかの割合でオンライン授業が後期も行われるでしょう。その場合、気になる事の一つに「オンラインスタイルの習熟度」があります。前期ではオンライン授業とは暗中模索的で手探りで暫定的な手段であったのに対し、それがある程度の慣れを経て講師・学生ともにさらなる技術の向上が望まれるとともに、一部では義務となるかもしれません。もともとはZoomなるソフトの利用を大学/講師が学生に強制することはできないはずで、それをうまく使えない、用いる知識のない学生を責める理由はありませんでしたが、後期授業では、円滑な授業を行うために最低限のZoom利用知識などが必要とされるかもしれません。その旨がシラバスに書かれるのかどうか、そうなった場合、学力以外の能力を受講条件として加えることになるのではないかと（それはいいのかどうか）、この点が気になるのです。

(外国語学部ロシア語専攻)